Argonauta 8: 1-2　(2003)

巻頭言　研究と金

以前、筆者が住んでいる地域の海洋系研究者の幾人かに、年に１度か２度互いの情報を持ち寄って海域の現状について話し合う集まりを持ちませんか、と声をかけてみたことがある。日ごろおつきあいをいただいている方々なので話はすんなり進むと思ったが、その一部から少々意外な反応が返って来た。ちょうどそのころ、文部省の科学研究費のプロジェクトが周辺海域で進行しつつあり、それとの比較という形に話を持って行かれるのである。それはそれとしてこちらはいかがですか、と聞いてみるのだが、色よい返事が返ってこない。どういうことかと首をひねった。私としては、海に興味のある研究者が集まって情報交換すれば、お互い有意義ではないかというぐらいに気軽に考えていたが、研究を職業にしている人達にとっては、必ずしもそういうものではないようだ。話しながら感じたのは、金の問題である。彼らにとって、研究と資金というのは不可分の関係にあり、研究者の集まりは金や組織を媒体として初めて成立する、というのが常識的な感覚であるらしい。わかりやすく言えば、その話は金が出るんですか、ということである。気のせいかもしれないが、話題が私にとっては予想外の金の話に進んで行くので、そういう印象を持ったのである。

公費にしろ、民間財団等の助成金にしろ、研究助成の手続きは、研究者個人ないしグループによる申請から始まる。当たり前のことだが、申請は受理されることも却下されることもある。本来ならば、事前にメンバーを決め研究計画を組み上げた上で、ここの所にこれだけ金がいる、という形で申請するべきだが、あまり細部まで詰めてしまうと金が下りなかった時のエネルギーのロスが大きい。そこでたいていの場合、申請者が大枠を決めて金を取り、その後に参加者を募って研究グループが成立するという形を取る。こうなると、金があるならやろう、という動機で入ってくるメンバーもあるだろうし、「金を取ってきた」申請者の発言力は大きくなる。下りた金は必ずしもそのテーマに限定して使われるとは限らない。ある程度は申請者の裁量に任される部分もあるはずであり、そのことが「あの人は資金力がある」「力がある」という評価につながる。最近は大学等研究機関の独立行政法人化の流れの中で、「金を取ってくる」力のある研究者が求められるようになりつつあるという話も聞こえてくる。

私自身、これまで助成を受けて研究をしたこともあるし、助成金を申請しませんかとか、お金を使いませんかと言っていただいたこともあるが、なるべく金を使わずに研究活動を維持することを心がけてきた。金というものは、使おうと思えば使えるものである。しかしそれに馴れると、金がなければ回転しない調査体制に陥る恐れがある。私がメインテーマとする生物相の長期的研究にとって、これは命取りになりかねない。金がなければできない測定項目、金が出るならと参加するメンバー…。こうした要素で固めると、金が続かなくなった時点で調査が頓挫するおそれがある。まさに「金の切れ目が縁の切れ目」である。長期研究の調査体制を調べた Duarte et al.（1992）

は、ヨーロッパで 1940 年代以降に開始された海洋生物の長期研究プロジェクトのうち、半数以上が 1980 年代末までに停止したことを示し、その主な理由として、社会的関心の喪失による資金供給の停止を挙げている。大規模な油流出事故などで、環境へのダメージが世間の注目を浴びると、その長期的影響を調べることを目的として計画が立てられ、当初は大金が下りて大規模な調査が始まる。しかし世間がそれを忘れるにつれ助成は先細りとなり、プロジェクトそのものも停止のやむなきに至る。こうしたことをくり返してきたというのである。その結果、この分野の研究は、研究者個人レベルの過重な負担の上にかろうじて維持されている、と Duarte らは嘆く。

しかし不肖私などは、長期研究が負担だと思ったことはない。基本的に好きだからやっているのであって、いやになったらやめる。もともとこの種の研究に継続的な資金の供給を期待するのは無理である。金がなくてもやるという研究者たちと、一緒にやって行ければよいだろう。金というものは、人々の意識にいろいろな影を落す。グループ研究に金はつきものと固定的に考えるところから、自由な研究交流さえ、金をからめて考えるという傾向が生まれてくるのではないか。金の用途や配分をめぐるトラブルもないとは言えない。

金を軽蔑したり、軽んじたりするのではない。「金のかからない研究」を標榜しようと、どこかで公的研究予算のお世話になっているだろうし、大金をかけなければできない研究というのも、もちろんある。2000 億円をかけたといわれるハッブル宇宙望遠鏡や、素粒子分析のための巨大加速器、トリスタンなどの大型プロジェクトを持ち出すまでもない。しかし生態学は、それらとはかなり趣を異にしている。べらぼうな金をかけて成果を挙げる分野がある一方で、ほとんど金を使わずに、頭と体で勝負できるのも科学であると、逆の極端を示すことができるならばそれも楽しい。長期変動研究は、金の力で維持されるのではない。それは研究者の志によって続けられ、受け継がれるテーマなのである。

＜ S ＞